



日本女医学会誌

公益社団法人日本女医学会
復刊第 215 号
2013 年 7 月 25 日発行
題字 吉岡彌生

卷頭言

～女性の知恵と絆で明日の医療を拓く～ を新たな目標に

平成 25 年 7 月吉日
会長 津田喬子



目まぐるしく天気が変わり、気づかぬうちに梅雨が明けて暑い夏を迎えました。会員の皆様にはお変わりなく日々の診療、研究、本会の活動にご活躍のことと存じあげます。

皆様をはじめ多くの方のご支援とご協力により、平成 25 年 3 月 24 日（日）に日本女医学会創立 110 周年ならびに公益社団法人認定記念式典・講演会・祝賀会を京王プラザホテル（東京）にて開催することができました。会員の皆様のご尽力に心より御礼申し上げます。

この祝賀事業の準備と並行して、宮城県女医学会と日本女医学会宮城支部では 5 月 20 日（日）開催に向けた第 58 回定時総会の準備が進められました。東日本大震災からの復興途上の大変厳しい環境にありながら、「あの時から見事に蘇っている宮城を見ていただきたい」との宮城県女医学会会長で宮城支部長の鈴木

カツ子先生のご英断でこの開催をお引き受け頂きました。復興を見据えた総会開催への全面的なご支援と、その復興状態の実見エクスカージョンおよび懇親会を見事に開催されましたことに深く感謝致します。

さて、祝賀事業を振り返ってみたいと思います。創立以来の会員の皆様による不断の社会貢献活動の実績がしっかりと評価されたことによって公益社団法人格の認定となり、創立 110 周年の節目と重なったことを記念して、平成 24 年度内に祝賀事業を開催することを理事会にて承認いただき、第 57 回定時総会後に準備に入りました。日本女医学会の歴史とその活動を国内外に広く知っていただくまたとない機会と捉え、祝賀事業のテーマ、～女性の知恵と絆で明日の医療を拓く～、には日本女医学会創設の精神を引き継ぎ、さらなる発展をこれからの世代にゆだねるという気持ちを込めました。元会長橋本葉子先生、前会長小田泰子先生、百周年記念事業実行委員長石原幸子先生には顧問就任をご快諾いただきました。

日本女医学会誌（第215号）もくじ

巻頭言	津田喬子 (1)	公益社団法人日本女医学会のご紹介	(8)
お祝い	安倍晋三 (2)	第 58 回定時総会概要	(10)
公益社団法人としての日本女医学会に望むこと	橋本葉子 (2)	第 1 回「支部・本部連絡会」のご報告	津田喬子 (11)
創立 110 周年ならびに公益社団法人認定記念式典式辞	津田喬子 (3)	各賞と学術研究助成授与	(12)
記念式典 式次第	(3)	受賞者のことば	(13)
祝辞	田村憲久、高久史麿、横倉義武 (4)	定時総会議事録	(15)
記念講演会「iPS 細胞の網膜変性疾患への応用」	高橋政代 (6)	京都支部の集い	石川知子 (18)
祝辞	吉岡博光 (6)	第 34 回 日本女医学会学術研究助成のご案内	(19)
祝賀会～記念祝賀会は華やかに～	対馬ルリ子 (6)	理事会議事録	(19)
祝賀会	(7)	寄附者一覧	(22)
		軽井沢セミナーのおしらせ／義援金報告／ 会員動静／編集後記	(24)

式典には参列者(131名)は凛とした気持ちで臨み、各界来賓の祝辞に加えてビデオよる外国からの祝辞も多数あって国際色豊かに執り行うことができました。式典に続く一般公開講演会には262名の参加者があり、理化学研究所網膜再生医療研究開発プロジェクトリーダー高橋政代先生の「iPS細胞の網膜変性疾患への応用」の最先端の研究と、この治療法をもってしても視力回復が望めない患者さんに対する高橋先生の科学者としての思い遣りに、聴衆は深い感銘を受けました。祝賀会(参加者137名)は東京女子医科大学室内楽団による生演奏と世界的なテナーの鹿児島大学医学部米澤 傑(すぐる)教授の歌唱とで開幕しました。橋本葉子先生のご発声によって高らかに祝杯をあげ、各界でご活躍されておられる皆様と会員との親睦や会員同士の交流を一層深めることが出来ました。祝賀会の締めとして会場の皆様と

ともに室内楽団の伴奏で、東日本大震災の復興を願って「ふるさと」と「上を向いて歩こう」を合唱できたことは忘れることはできません。

本号では祝賀事業と、復興された宮城での定時総会を紹介しています。この祝賀事業を通して私たちの心に刻まれた思いは、明治35(1902)に年創設された日本女医会の歴史の重みを担うすばらしい誇りでした。そして、被災地では地域の復興を見事に支えられた女性医師の素晴らしさを再認識致しました。女性の知恵と絆は、これからの女性医師の活動を拓いていくために必要と信じております。

今後とも、いっそうのご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後となりましたが、女医会事務局スタッフに感謝します。

お祝い

日本女医会創立110周年、誠におめでとうございます。
日本女医会は、創立以来、長年にわたる活動により、我が国医学・医療の発展と女性の社会的地位の向上に多大の貢献をされました。
創立110周年と公益社団法人認定という節目を迎え、今後益々、医学・医療の発展、男女共同参画社会の形成、国際相互理解の促進等、社会に貢献されますことを祈念致します。

内閣総理大臣 **安倍晋三**



公益社団法人としての日本女医会に望むこと

祝賀事業実行委員会顧問 **橋本葉子**

2012年に創立110周年を迎えた日本女医会は同時に公益社団法人に認定された。日本女医会はまた、種々の女性団体から構成されている国連NGO国内婦人委員会や国際婦人年連絡会の構成団体になっており、社会活動に貢献している。

第3次男女共同参画基本計画の重点分野は、従来の分野に更に5分野が追加された。特徴として、「2020年に指導的地位に女性が占める割合を少なくとも30%程度とする目標に向けた取り組みを推進」、「女性の活躍による経済社会の活性化や(M字カーブ問題)の解消も強調」が挙げられている。

日本女医会に取り組んで欲しい重点分野は、第9分野「女性に対するあらゆる暴力の根絶」、第10分野「生涯を通じた女性の健康支援」、第12分野「科学技術・学術分野に於ける男女共同参画」、第15分野「国際規範の尊重と国際社会の【平等・開発・平和】への貢献」などがある。医療界は特に女性医師の指導的地位に占める割合が低い世界であり、医科系大学における女性の講師・准教授・教授は約5%である現実を見る時、30%は夢のような目標値である。しかし、夢の実現に向けて頑張っ欲しい。そのために女性医師は医療活動を継続することが必須であり、併せて、可能な限り社会活動も続けて頂きたい。

創立 110 周年ならびに 公益社団法人 認定記念式典式辞

会長 津田喬子

Anniversary 110th

木の葉が温かい日差しに輝いて、心の浮き立つ季節となりました。ここ東京では、満開の桜がいっそう華やきを添えている想いが致します。

本日ここに、多くのご来賓の皆様そして会員の皆様のご出席を賜りまして日本女医会創立 110 周年ならびに公益社団法人認定記念式典を開催できますことは、私のこの上ない喜びでございます。この日にご参集賜りました皆様に心より御礼申し上げます。

我が国において、女性が医師となる道のりは平坦んではありませんでした。苦難の末に医師への門戸を切り開いた荻野吟子、医師を志す女性に勉学の場を与えた吉岡彌生、女性の社会的地位向上と女性医師の研鑽を目的として、この日本女医会創設に心血を注いだ前田園子らの諸先達をはじめ、将来に向けての深い洞察力と実行力を備えた方々の偉大な功績に、改めて深い敬意をもってこの日を迎えた次第でございます。

日本女医会創立の志は、110 年の長きにわたり世代から世代へと受け継がれ、会員による女性医師の地位向上への絶え間ない努力、女性にしか出来ない地域貢献・社会貢献が、昭和 44 年の社団法人認定、そして平成 24 年 4 月の公益社団法人認定として結実に至りました。

今は、男女平等に医学部、医科大学への進学を選択でき、平等な医学教育を受け、医師とすることができます。新しい時代となって、環境は整いつつありますが、先人の描き続けた女性医師としての力量を存分に医療に役立てる環境や社会の医師は、諸外国に後れを取っています。医学部・医科大学の教授、医療施設の長、各医学会の理事、役員、医師会役員など、意思決定の場へのさらなる女性医師の参画の実現が望まれます。私たちには、今までのキャリアに誇りを持ち、それを愛し、医療への貢献をしっかりと達成するという意味において、メンターとして、教育者として、後輩医師のキャリア継続意志の醸成と、キャリアを継続できる環境をよりよく作りあげていく大きな使命も課せられていると思っております。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災発生時には、それまでの震災支援の経験から、日本女医会はいち早く募金活動を開始し、尊いお金を復興に役立てることができました。改めて、会員の皆様に感謝申し上げます。

公益社団法人認定の女性医師団体として、我が国の未来に何をなし得るかに想いを馳せる時、創立百周年の記念式典にて賜りました皇后陛下のおことばを忘れることはできません。「地域の人々を病から守り、健康な暮らしを営む上の大きな力となること、男女共同参画の時代に入ったこれから女性の権利と特性をどのようにとらえ、会員が心一つに模索を続ける中で、女医会がおのずから未来の姿を形作ることを見守りたい」とのおことばでございました。

私達は、日本女医会創立の理念を深く思い起こし、新しい時代をさらに切り拓く団体として、リーダーシップを発揮したいと考えます。会員とともに、この日を機に、これまで以上の努力を致す所存でございます。ご来賓の皆様には、一層のご指導ならびにご支援を賜りますようお願い申し上げます。

本日のご臨席に対し、深く感謝いたしまして式辞とさせていただきます。

平成 25 年 3 月 24 日

記念式典 式次第

平成 25 年 3 月 24 日 13 時 30 分～14 時 30 分
司会進行 木幡美子

開会の辞	副会長 澤口彰子
国家斉唱	
日本女医会会長式辞	会長 津田喬子
来賓祝辞	厚生労働大臣 田村憲久 殿 内閣府男女共同参画担当大臣 森まさこ 殿 日本医学会会長 高久史磨 殿 日本医師会会長 横倉義武 殿
祝 辞	国際女医会 (Video Message) 国際女医会会長 Dr. Afua Hesse 国際女医会事務局長 Dr. Shelley Ross 西太平洋地域会議副会長 Dr. Rosa Maria Nancho
表 彰	東日本大震災救援寄付者 江畑理佳 殿
閉会の辞	副会長 小関温子

祝辞



厚生労働大臣 田村憲久

公益社団法人日本女医会の創立110周年記念式典が開催されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

貴会は、明治35年の創立以来、「女性医師相互の研鑽・親睦および地位の向上」、「福祉の増進や地域医療等の社会活動」、「国際交流と親善」などの活動をされており、日本における保健医療の発展に大きく貢献してこられました。これまでの関係者の皆様のご尽力に対し、改めて敬意を表します。

現在、日本の医療を巡る環境は、急速な少子高齢化、医療技術の高度化、これに伴う国民の医療サービスへの需要の多様化など大きく変化しています。

女性医師の割合も年々増えており、平成22年時点では20%近くを占めるまでになっています。医学部に入学される女性の割合は約3分の1程度であることから、今後も女性医師が増え、更に医療提供体制の重要な役割を担っていくことになります。

このような状況において、女性医師の皆様が出産・育児を終えた後も引き続き、業務に従事していただくためのキャリア形成の確立が喫緊の課題です。

そういった意味でも、貴会が女子医学生のためにセミナーやシンポジウムを開催されていること等は、大変重要だと考えています。

また、昨年4月に日本女医会が公益社団法人へ移行されたことは、これまで以上に、国民に信頼される活動を行い、保健衛生の向上にさらに貢献していくという思いの表れと受け止め、心強く感じています。

創立110周年、そして公益社団法人への移行を契機として、皆様が、より一層自己研鑽を進め、医師としての資質の向上を図ることにより、国民の期待に添えていただけると強く確信しています。

貴会のますますのご発展と皆様のご健勝、ご活躍を心からお祈りし、私のお祝いの言葉と致します。

日本医学会 会長 高久史磨

日本女医会が創立110周年を迎えられること、また、この度公益社団法人になられた事を日本医学会長として心からお祝い申し上げます。

我が国の医学・医療の展開にとって女性医師の存在が欠かせない事は周知の事実であり、女性医師の重要性は今後ますます増大するものと信じています。

今回の記念式典のテーマである～女性の知恵と絆で明日の医療を拓く～は我が国の医学・医療の今後の発展の姿を、そのまま表した言葉であります。改めて公益社団法人日本女医会のご発展をお祈り致します。

日本医師会 会長 横倉義武

「日本女医会創立110周年ならびに公益社団法人認定記念式典・祝賀会」にお招きいただき、津田喬子日本女医会会長をはじめ関係者の皆様のご芳情に厚く御礼申し上げます。日本医師会を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

はじめに、日本女医会の皆さまが、長きにわたり女性医師の社会的地位の向上、さらには地域医療や国際交流・親善に広く貢献されてこられる中で、昨年4月には公益社団法人に移行されましたこと、心よりお祝い申し上げます。そして、このたび、110周年を迎えられましたことは、ひとえに歴代役員並びに会員各位、そしてそれを支えてこられました職員の皆様のご努力の賜物と、深く敬意を表する次第でございます。

さて、皆様ご承知のとおり、医療は国民生活に欠かせない社会的共通資本であります。その土台には、国民すべてが平等に必要な医療をうけられるという、世界に冠たる「国民皆保険制度」があります。昨今、この制度の根幹を揺るがしかねない動きも見受けられるところでありますが、これを維持し、後世に伝え

ていくことは我々の使命であります。そのためには、まず、我々が仕事にやりがいを持って健康的に生活できるワーク・ライフ・バランス実現に向けた処遇改善や健康支援、そして今後ますます増えてくる女性医師が勤務しやすい環境整備をさらに一層推進していくことが求められてまいります。

日本医師会では、女性医師の就労継続支援が医師全体の就労環境の改善にもつながる重要な課題であるとの認識に立ち、女性医師支援センター事業を通じて「仕事から離れた女性医師の再就業支援」や「女性医師の勤務継続への支援」等の活動を実践しているところであります。

また、女性医師会員に「本会の組織・運営・活動にかかわる理解を深め、将来、本会の活動に参加し

ていただく」こと、そして2020年には指導的な立場にいる女性の割合が30%になることに願いをこめて「2020・30」推進懇話会を開催しております。ワーク・ライフ・バランスの保たれた男女共同参画社会の実現を目指し、そして、“国民の健康と生命を守る専門家集団”として、世界に冠たる国民皆保険の堅持を主軸に、国民に求められる医療提供体制の実現に向けて、今後とも政策提言を続けてまいりたいと思えます。日本女医会の先生方におかれまして、今後とも、ご指導ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

結びに、本日ご参集の皆様方のご健勝と、日本女医会の今後ますますのご発展を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

MEDICAL WOMEN'S INTERNATIONAL ASSOCIATION OFFICE OF THE VICE PRESIDENT – WESTERN PACIFIC REGION

M E S S A G E

It is my singular honor and pleasure to convey my warmest felicitations and greetings to Japan Medical Women's Association on the occasion of its 110th Foundation Anniversary.

JMWA has withstood the test of time. Its existence for a century and a decade is a living proof of its strength, dynamism, and invaluable worth as an association conceived to upgrade and advance medical practice and promote quality health care. The recent elevation of its status from a general corporation to a public service corporation by the Japanese government is a glowing testament to its enviable stature as a leading exponent and advocate of excellent health care in Japan and beyond. It is also a fitting recognition of the capacity for greatness of the women physicians of Japan in the domain of medical service – a tribute to their unwavering commitment to serve humankind unselfishly and selflessly.

We live today in a global village. We can no longer afford to live in isolation. Our needs and concerns are interconnected and interrelated. As women physicians, we must act in concert, galvanizing ourselves into women of character and substance – resolute and unyielding in our resolve to help make Planet Earth a much better place to inhabit, health-wise. The growing complexities of life in our borderless world make it necessary for us women physicians to focus boldly on meaningful health issues to enable us to equip ourselves with adequate and appropriate knowledge, training, and skills needed to cope with the medical and health care challenges now and in the future.

The Medical Women's International Association is one with the JMWA in all its endeavors and advocacies. Let us continue to link our arms together in the fulfillment of our common vision to improve the lot of humanity.

As I bow out of office as MWIA's Vice President for the Western Pacific Region, I heartily welcome and congratulate my worthy successor, Dr. Hiroko Yamamoto. I wish her every success in her new position. With her at the helm of the MWIA in this part of the world, we will be all in good hands.

Again, congratulations and more power to JMWA!

Rosa Maria A. Nancho

ROSA MA. HIPOLITO-NANCHO, M.D.
Vice President – Western Pacific Region
Medical Women's International Association



日本女医会創立 110 周年ならびに 公益社団法人認定記念講演会

iPS 細胞の網膜変性疾患への応用

講演者 **高橋政代** 先生

(理化学研究所 網膜再生医療研究開発プロジェクトリーダー)



式典終了後には、理化学研究所網膜再生医療研究開発プロジェクトリーダーの高橋政代先生による記念講演会が開催されました。医療関係者から、一般の方まで多くの方で会場は満席となり、iPS 細胞に対する関心と期待の大きさが窺われました。

祝辞

東京女子医科大学理事長
吉岡博光

本日、日本女医会の創立 110 周年記念祝賀会が挙行されるにあたり、祝辞を述べる機会を得ました事は、誠に光栄であり、私の最も欣快と致すところでありまして、心からご祝福申し上げます。また、平成 24 年 4 月 1 日より、公益社団法人の認定を受けられたという二重の意味での慶事に、あわせてお慶び申し上げます。

さて、日本女医会の創立者の一人である私の祖母、吉岡弥生はその生涯を賭けて、当時、いかにも低かった女性の社会的地位を向上させようとしたのであります。そして、女性の地位を向上させるためには、まず女性に経済的能力を与えなければなりません。それには、吉岡弥生が医師であること、また医学、医療は女性に適している立派な職業でもあることから、医師への道が最適と考え、東京女子医科大学が創立されたのであります。

ひるがえって、現在の我が国の状況を見るに、女性の社会進出は当時と比べますと、大きく改善されておりますが、世界的に見ても未だ十分とは言えないことは周知の通りであります。しかしながら、男女共同参画推進局のデータによると、1976 年に 12,073 名であった女性医師は、2010 年には、53,002 名に順調に増えており、これは先人の偉業と、日本女医会会長の津田喬子先生はじめ、この場にお集まりの皆様のご尽力の賜物と心より敬服する次第であります。

また、大正 12 年の関東大震災後、罹災者の救済運動を第一目標として、結成された東京連合婦人会に日本女医会の代表として参加した吉岡弥生は、その

会報誌「連合婦人」発行に際して、女性について「悲境に陥れば陥る程、団結する美しさを持って居る。」と述べています。平成 23 年 3 月 11 日に我が国を襲った未曾有の大災害において、多くの女性医師が現場にかけつけ、その心が未だ息づいていることが証明された事は、記憶に新しい事であります。

このように、日本女医会の活動は有形・無形を問わず、成果をあげており、今後も引き続き津田喬子先生の下、日本女医会が我が国にとって、無くてはならない組織として、更なる発展を遂げる事を願い、祝辞とさせていただきます。

祝賀会

～記念祝賀会は華やかに～

副理事 **対馬ルリ子**

式典のあとの記念祝賀会は、大勢の来賓の方々や全国から集まった会員の皆様の出席のもと、京王プラザホテルのコンコードボールルームにて華やかに開催されました。

津田会長のご挨拶のあと、まずは祝賀の歌とピアノの演奏です。泉博子さんのピアノ伴奏で米澤傑先生の素晴らしい歌声に酔いしれました(いつまでも鳴りやまない拍手大喝采!)

その後、来賓のご祝辞をいただきました。衆議員議員の嶋下一郎様、東京女子医科大学理事長の吉岡博光様、日本医師会常任理事(男女共同参画担当)の小森 貴様。どの方も、日本女医会の長い歴史と先人のなした大きな軌跡に触れていただき、またこれ

祝賀会

日本女医会創立110周年ならびに公益社団法人認定記念
祝賀会
～女性の知恵と絆で明日の医療を拓く～



からの日本女医会の、医学医療への貢献、そして女性医師育成に対する大きな期待についても言及されました。

それから来賓、前役員の皆様、現執行部による鏡開きが賑々しく行われ、清酒「開運」2樽を、皆でいっせいに開け、橋本葉子前会長のご発声で乾杯いたしました。

お料理は、京王プラザご自慢のフレンチのフルコースで、ワインやシャンパンもふるまわれ、会場はたくさんの方々の談笑と記念撮影で、とても賑やかなものとなりました。また次々に参加者のご歴々のご挨拶、

ご祝辞、祝電が披露され、華やかさは最高潮に達しました。

最後は、津田会長の音頭のもと、皆で「ふるさと」「上を向いて歩こう」を合唱し、名残を惜しみつつ閉会となりました。

この会は、これまでの日本女医会の110年を振り返りつつ、皆で公益社団法人としてのこれからの日本女医会のあり方を考えるよい機会となりました。これもひとえに会員の皆様、日本医学会、日本医師会はじめ諸機関の方々のご協力のおかげと、心より感謝もうしあげます。



【沿革】

- 1902年(明治35年)4月
前田園子、吉岡彌生らが中心になり創設
- 1969年(昭和44年)10月11日
社団法人(厚生省収医345号)
- 2002年(平成14年)5月18日
創立100周年記念事業(式典・祝賀会)
- 2012年(平成24年)4月1日
公益社団法人認定(内閣府)

【事業】

1. 各賞の授与
 - 1) 吉岡弥生賞(医学又は社会に貢献をしたもの)
1969年(昭和44年)設立
 - 2) 荻野吟子賞(独自の活躍をもって女性の地位向上に著しい貢献をしたもの)
1972年(昭和47年)設立
2. 学術研究助成事業
 - 1) 若い研究者のための学術研究助成
3. 医学に関する研究会及び講演会の開催及び後援
4. 医学生及び若手医師支援活動
 - 1) 女性医師社会的問題に関する提言募集と表彰
 - 2) MsACT (Medical students & young

- doctors ACT)
- ・医学英語セミナー開催
- ・キャリア形成支援
- 5. 男女共同参画事業
 - 1) 女性医師支援シンポジウム開催およびキャリア形成支援の普及啓発活動
 - 2) 他団体の男女共同参画事業における委員活動
- ・内閣府男女共同参画推進連絡会議
- ・日本医師会男女共同参画推進委員会
- 6. 国際女医会加盟団体としての活動
別掲(国際女医会活動参照)
- 7. 国連 NGO 国内婦人委員会、国際婦人年連絡会等の活動
 - 1) 日本・アラブ女性交流事業(外務省からの委託で国連 NGO 国内婦人委員会が担当)
第22回を日本女医会が担当
2008年(平成20年)10月31日～11月7日
テーマ「リーダーシップの達成とその成果」
ヨルダン、シリア、エジプト訪問(平敷淳子、小田泰子、津田喬子)
第23回を日本女医会が担当
2009年(平成21年)1月28日～2月4日
ヨルダン、エジプト代表来日(ファリス先生、ヘルミー女史)
高円宮表敬訪問(1月掛川フォーラム「リーダーシップの達成とその成果」開催(1月31日))
- 8. 公衆衛生活動及び地域医療活動への助成
- 9. 機関誌発行 日本女医会誌
- 10. 刊行物
日本女医会100年史
補遺

- 冊子 どうしよう子どもの救急
What shall we do Children's emergency (どうしよう子どもの救急英語版)
- 11. その他
ブロック懇談会開催
奈良県、福島県、兵庫県、石川県、岐阜県、佐賀県など
2010年 APEC 女性リーダーズネットワーク会合(東京)に参加

【過去10年間の活動実績】

- ◆ 2011年度(平成23年度)
 1. 9月4日
第5回医学を志す女性のためのキャリア・シンポジウムを開催(東京)
「各大学における女性医師支援の成果と問題点」
 2. 11月13日
子育て支援委員会地区ゆいネット活動(名古屋ウインクあいち)
内閣府男女共同参画推進連絡会議 DV に関する小委員会助成
「若者の性の問題に対するより効果的な連携に向けて-女性の性暴力を防ぐへ～」
- ◆ 2010年度(平成22年度)
 1. 助成金事業「十代の性の健康支援ネットワーク事業」を遂行
 2. 第10回国際女医会西太平洋地域会議の開催に向けての準備
 3. 9月〇日
内閣府男女共同参画局主催、2010APEC 女性リーダーズネットワーク会合に参加
 4. 12月〇日
第4回医学を志す女性のためのキャリア・シンポジウムを開催(東京)
「女性医師が仕事をなぜ辞める? 女性医師が辞めない職場とは」

◆ 2009年度(平成21年度)

1. 助成金事業「十代の性の健康支援ネットワーク事業」を遂行
2. 助成金事業「在宅高齢者(嚥下障害者・胃瘻増設者)の栄養管理事業」を遂行
3. 第10回国際女医会西太平洋地域会議の開催に向けての準備
4. 10月25日
第3回医学を志す女性のためのキャリア・シンポジウムを開催(東京)
「女性医師が働き続けられる環境の実現に向けて」

◆ 2008年度(平成20年度)

1. 助成金事業 十代の性の健康支援ネットワーク作り事業
2. 助成金事業 嚥下障害者、胃瘻増設者の栄養管理事業
3. 医学を志す女性のためのキャリアデザインセミナー開催(東京)
～キャリアもライフもピカピカに磨こう～

◆ 2007年度(平成19年度)

1. 助成金事業 21世紀のこどものために小児救急医療の整備と提言
2. 在宅高齢者(嚥下障害者、胃瘻創設者)の栄養管理

◆ 2006年度(平成18年度)

1. 助成金事業 21世紀のこどものために小児救急医療の整備と提言
2. たんの吸引を安全に行うための教育講習

◆ 2005年度(平成17年度)

1. 助成金事業 働く女性のための育児環境整備支援事業

◆ 2004年度(平成16年度)

1. 「十代の性と健康」指導者養成講座開催
2. 助成金事業 働く女性のための育児環境整備支援事業

◆ 2003年度(平成15年度)

1. 「十代の性と健康」指導者養成講座開催

◆ 2002年度(平成14年度)

【国際女医会活動】

◆ 国際女医会 (Medical Women's International Association)

国際女医会は全世界の女性医師で構成される国際 NGO 団体で、90カ国の女医会が所属しています。1919年にニューヨークで万国女医会として創立され、日本女医会からは井上友子会員が設立のための会議に参加しました。1922年にジュネーブで第1回委員会、1924年に第1回国際女医会議が開催され、以後3年毎に世界各国で開催されています。各国の

ナショナルコーディネータを通じ、国際女医会本部と各国の女医会および WHO、UNICEF、NGO 団体と連携し活動を行っています。

主たる活動目的は、各国女性医師間の交流、全世界の女性医師における男女共同参画とその実現、人類の健康とより良い人間性維持のための学術交流です。

国際女医会は、WHO に準じ、世界を8つの領域に分け、日本女医会は国際女医会西太平洋地域に所属しています。西太平洋地域の学術会議も3年毎に開催され、日本では、1976年に第15回国際女医会議(東京、会長小野春生)、1993年に第5回国際女医会西太平洋地域会議(京都、会長山崎倫子)、2004年第26回国際女医会議(東京、会長橋本葉子)を開催しました。2011年には、第10回西太平洋地域会議(東京、会長 Dr. Rosa Nancho)を開催予定でしたが、東日本大震災のため中止となりました。

今後、2013年には第29回国際女医会議が韓国にて開催されます。第28回国際女医会議は、2010年にドイツにて開催され日本女医会からは30名の会員が参加しました。

◆ 国際女医会の組織(2012年7月現在)

President

Professor Afusa Hesse (Ghana)

Immediate past president

Dr. Atsuko Heshiki (Japan)

President elect

Professor Kyung Ah Park (Korea)

Treasurer

Dr. Gail Beck (Canada)

Secretary general

Dr. Shelley Ross (Canada)

Regional vice presidents

▼ Northern Europe

Dr. Cisca Griffioen (The Netherlands)

▼ Central Europe

Dr. Waltraud Diekhaus (Germany)

▼ Southern Europe

Dr. Alexandra Kalogeraki (Greece)

▼ North America

Dr. Claudia Morrissey (USA)

▼ Latin America

Dr. Mercedes Viteri (Ecuador)

▼ Near East and Africa

Dr. Petronilla Ngioli (Tanzania)

▼ Central Asia

Dr. Pattariya Jarutat (Thailand)

▼ Western Pacific

Dr. Rosa Nancho (The Philippines)

Committee chairpersons

▼ Finance

Dr. Eleanor Nwadinobi (Nigeria)

▼ Ethics & Resolutions

Dr. Gabrielle Casper (Australia)

▼ Scientific & Research

Professor Bettina Pfleiderer (Germany)

1) 第15回国際女医会議開催(東京) 1971年(昭和46年)

2) 第5回国際女医会西太平洋地域会議開催(京都)

テーマ「高齢化社会における医療」

3) 第26回国際女医会議開催(東京) 2004年(平成16年)7月28日～8月1日(東京)

4) 第10回国際女医会西太平洋地域会議開催(東京)

2011年(H23)5月26日～29日

テーマ「感染性・非感染性疾患のパンデミック」

東日本大震災のため中止となった。

5) 日本女医会会員による歴代国際女医会役員

1974年～1976年

小野春生 会長

1981年～1984年

山崎倫子 西太平洋地域会長

1995年～1998年

橋本葉子 西太平洋地域会長

2007年～2010年

平敷淳子 会長

2013年～2016年

山本繡子 西太平洋地域会長

【記念行事】

・創立百周年記念式典(京王プラザホテル) 2002年(H14)5月18日 皇后陛下ご臨席

・第26回国際女医会議記念式典(京王プラザホテル)

2004年(H16)7月31日 皇后陛下ご臨席(非公式)

・第23回日本・アラブ女性交流事業

2009年(H21)2月2日

高円宮妃久子殿下表敬訪問

・第10回国際女医会西太平洋地域会議式典(京王プラザホテル)

2011年(H23)5月27日 常陸宮正仁親王妃華子殿下 東日本大震災により中止

【東日本大震災支援事業】

1. 平成23年3月17日に日本赤十字社へ義捐金寄附

2. 平成23年4月に健康飲料水(ピアピアンテ)寄贈

南三陸町総合体育館ベイサイドアリ

- 一ナ (300本)、檜葉町いわき現地災害対策本部 (300本)、宮城県石巻市総合運動公園災害物資支援センター (400本)
- 3. 平成23年5月25日～5月27日、被災地見舞いと義捐金委託
福島県郡山市、宮城県仙台市、岩手県釜石市、青森県八戸市、栃木県宇都宮市、千葉県浦和市
- 4. 平成23年6月
岩手県南三陸町陸前高田保育所へ中古ピアノ寄贈
- 5. 平成24年4月8日
陸前高田仮設診療所、県立陸前高田

- 病院および陸前高田保育所訪問
- 6. 平成24年6月
陸前高田保育所へ冊子「どうしよう子どもの救急」250冊寄贈
- 7. 平成24年7月
陸前高田保育所へ冊子「どうしよう子どもの救急」300冊寄贈

【各支部の活動】

- ◆宮城県支部
神奈川支部総会
2012年特別講演「須磨久善先生」
- ◆埼玉支部
2012年7月15日(日) 東邦音楽大学准

教授 医学博士、音楽療法士
特別講演「馬場 存先生」「音楽の力 音楽療法の治療的側面」

◆愛知県支部
総会
学術講演会：2012年2月4日(土) 東北
大心療内科教授 福士 審先生[PTSD
について]

◆女性医師による健康相談室
大阪支部
栃木支部
青森支部
その他

第58回 公益社団法人日本女医会定時総会 概要



2013年5月19日、第58回定時総会は定刻通り午前10時45分に庶務部担当馬場安紀子理事が開会を宣言した。

澤口彰子副会長による開会の辞が述べられた後、総会成立に必要な出席者の確認がなされ、定款規定通りの会員総数の2分の1以上の出席者81名、および記名委任者数755名が報告され、これをもって総会の開会を宣言した。その後平成24年度に物故された28名の会員に対して黙祷が捧げられた。

会長挨拶では、本年度総会開催地である宮城県の宮城県女医会の皆様への感謝が述べられ、その後3月24日に行われた創立110周年ならびに公益社団法人認定記念行事の報告が行われた。

小関温子副会長により平成24年度会務報告に基づき行われた。

ナショナルコーディネーターの矢口有乃理事から、平成24年度の活動報告のほか、7月31日から韓国・ソウルで開催される第29回国際女医会議への参加の呼びかけがあった。

次に議長団の選出があり、会長一任で議長団に高木久佳会員(神奈川支部)、黒崎伸子会員(長崎支部)、議事録署名人には藤根美穂会員(北海道支部)、金田八重子(青森支部)が任命され、議事進行がなされた。

議事

- 第1号議案 平成24年度事業報告の承認の件
- 第2号議案 平成24年度決算報告書承認の件
会計監査報告
- 第3号議案 平成25年度事業計画
- 第4号議案 平成25年度予算の承認の件
- 第5号議案 次期および次々期総会開催地に関する件

表彰

表彰では、日本女医会荻野吟子賞は、加藤治子会員(大阪第3支部)に授与された。

学術研究助成は、窪田泰江氏(名古屋市立大学泌尿器科・講師)、齋木由利子氏(東北大学医学系研究

科：助教)、坂根亜由子氏(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・助教)に授与された。

第2回提言論文優秀賞は、皆川智子氏(弘前大学医学部付属病院皮膚科・医員)、安川康介氏(バイラー医科大学感染症科フェロー)、安岡紗哉香氏(徳島大学医学部3年)に授与された。

講演会

総会終了後に、ランチョンセミナーとして、国家公務員共済組合連合会虎の門病院睡眠呼吸器科部長成井浩司先生による講演、『女性と睡眠時無呼吸症候群』が、その後『東日本大震災の体験と災害医療』の題で、東北大学病院総合地域医療教育支援部石井正教授による講演会が開催された。(文責/広報部)

第1回「支部・本部連絡会」のご報告 会長 津田喬子

宮城県女医会のお世話で、平成25年5月19日(日)に仙台国際ホテルにおいて公益社団法人日本女医会第58回定時総会を無事開催することができました。宮城県女医会、日本女医会宮城支部ならびに会員の皆様に心より御礼を申し上げます。

従来は総会前に評議員会を開催しておりましたが、公益法人への移行に伴い評議員をおくことが規定上できなくなりました。しかし、日本女医会本部と各支部および会員の皆様との交流・連携は今までと何ら変わることはなく、日本女医会の発展にはさらに一層の連携推進が不可欠なことから、「評議員会」に替わるものとして「支部・本部連絡会」と名称を新たにしまして、支部長のみならず会員であればどなたでも参加していただける会と致しました。

第1回の「支部・本部連絡会」は総会当日の午前9時30分という早くからの開催でしたが、北海道から九州に至る全国各地より多数の皆様が参加下さいました。各支部からご報告いただきました実情および皆様との活発な意見交換から、今後の日本女医会の活動方針の策定に大きな収穫を得ることが出来ました。誠にありがとうございました。

この会でできました皆様疑問に思われている点や日本女医会に期待されていることをまとめてみました。

- 1) 支部名称許諾に関して、支部名をどのようにしたらよいか
- 2) 他職種や学生との連携が重要である
- 3) 活動の実例として女性医師支援サポーター制度の紹介
- 4) 女医会支部と県行政または地域女医会との活動の接点の模索
- 5) どのような範囲で支部として活動をするか
- 6) 支部会員が減少している

- 7) 日本女医会本部が音頭を取る形で支部との連携をより積極的に行って欲しい
- 8) 会員相互のフレンドシップの重要性
- 9) 男性の意識改革に関する提言をもっと明確に社会に向かって発信する
- 10) 日本女医会会員となるメリットはどこにあるか
- 11) 女医会独自の視点に立った活動が必要である
- 12) 支部・本部連絡会開催の要項を作成する

かつては日本女医会が唯一の女性医師団体でしたが、現在は県行政内、医師会内、学会、地域、大学内などに様々な女性医師の会が誕生してそれぞれに活動をしています。このような状況にあって日本女医会のメリットを考えますと、第1には日本女医会入会と同時に国際女医会会員となれることです。世界に開かれた女性医師団体であることが日本女医会の強みです。1974年には小野春生会員、2007年には平敷淳子会員が国際女医会会長に就任されています。また日本女医会が所属する国際女医会西太平洋地域においても、1981年には山崎倫子会員、1995年には橋本葉子会員が西太平洋地域会長となっております。第2は創立110年となる歴史です。歴史ある会の一員であるという誇りが私達を支えています。第3は2012年4月に公益社団法人に認定されたボランティア団体であり、どの組織とも利害関係を持たないが故に忌憚のない独自提言ができることです。

したがって、私達日本女医会の視点に立った活動をこれから推進していかなくてはなりません。「支部・本部連絡会」は毎年の定時総会時に開催して支部の皆様との交流と親睦を深めるとともに、中断してしまっていたHPの「支部だより」を再開して情報発信をしっかりと行い、支部の皆様との一層の繋がりを推進してまいります。ご支援とご協力をお願い申し上げます。

第1回「支部・本部連絡会」

会場：仙台国際ホテル桜の間 日時：平成25年5月19日（日）午前9時30分～10時30分

出席者名（敬称略、お名前が抜けていましたらお許し下さい）：

北海道支部	澤田香織、藤根美穂	東女内支部	渡辺弘美
青森支部	金田八重子、高橋栄子	神奈川支部	大竹輝子
秋田支部	小泉ひろみ	山梨支部	山西律子
山形支部	豊岡志保	愛知県支部	小栗貴美子、小出詠子
宮城支部	小田泰子、鈴木カツ子、 高橋美奈子、山本蒔子	長野支部	河野直子
群馬支部	平敷淳子、山田邦子	岐阜支部	新美佐知子
埼玉支部	平山晴美	大阪第6支部	中川やよい
栃木支部	菊池洋子、清水いはね	大阪第10支部	野崎京子
文京支部	中原千恵子	福岡支部	樗木晶子
		長崎支部	黒崎伸子、石井伸子

会長 津田喬子（愛知県支部）

副会長 小関温子（神奈川支部）、澤口彰子（港支部）、対馬ルリ子（中央支部）

理事 大谷智子（荒川支部）、古賀詔子（宮城支部）、齊藤恵子（岩手支部）、高原照美（富山支部）、
田辺晶代（東女内支部）、塚田篤子（栃木支部）、中田恵久子（埼玉支部）、馬場安紀子（栃木支部）、
濱田啓子（北海道支部）、藤川真理子（都下西支部）、前田佳子（神奈川支部）、宮崎千恵（岐阜支部）、
矢口有乃（東女内支部）、山本纈子（愛知県支部）、吉馴茂子（大阪第9支部）、横須賀麗子（佐賀支部）

監事 松井ひろみ（目黒支部）、山崎トヨ（栃木支部）

<各賞と学術研究助成授与>

日本女医会荻野吟子賞

加藤治子（大阪第3支部）

昭和49年大阪市立大学医学部卒業後、大阪大学医学部産婦人科学教室を経て、阪南中央病院産婦人科へ。社会的ハイリスク妊産婦の支援に尽力する。平成21年「女性の安全と医療支援ネットワーク」準備室創設。平成22年「性暴力救援センター・大阪（通称SACHICO）」を院内に開設し、性暴力対応ワンストップセンターとして24時間体制で性暴力被害者救済に邁進する。

学術研究助成

窪田 泰江氏（名古屋市立大学泌尿器科・講師）

「過活動膀胱の発症機序における SCF-KIT（幹細胞因子）シグナル伝達系の機能解析
—SCFを用いた過活動膀胱の新規尿中バイオマーカーの開発—」

齋木 由利子氏（東北大学医学系研究科・助教）

「マイクロRNAによる食道がんの抗がん剤感受性予測」

坂根 亜由子氏（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・助教）

「組織・器官の発生・再生に関わる細胞運動の制御機構の解明」



受賞者のことば

荻野吟子賞を受賞して

はるウィメンズクリニック院長 加藤治子



2013年5月19日、第58回日本女医会総会におきまして、荻野吟子賞を授与されました。

推薦をいただいた吉馴茂子理事をはじめ選考委員の皆様にご心より御礼を申し上げます。

「荻野吟子」という名は、私にとって「産婦人科医師としての原点」ともいえる偉大な名前です。その方の名前を戴いた賞を授かったことは光栄の極みです。私は医学部の学生の時、渡辺淳一の「花埋み」という荻野吟子の一生を描いた小説を読みました。淋病を夫よりうつされた「ぎん」が一念発起して女性医師の第1号になり、自立した女性として生き抜く姿は、自分が如何に生きるかの大きな指針になったと同時に、性病が女性の心と身体に及ぼす影響がいかに大きいか、そして女性の医療を考える上でこの問題はとても重要な課題であるという、漠然とはしていましたが感想を持ったのを覚えています。

1974年に卒業し産婦人科医をめざした私は、1975年より現在まで、大阪府松原市にある阪南中央病院という中規模の地域の総合病院で働いてきました。1986年には、院内に周産期社会的ハイリスク妊産婦研究会を立ち上げ、助産師が妊婦の住居に訪問し、差別と貧困の中で暮らす妊婦や子どもの暮らしぶりをつぶさに見てきては、その様子を持ち帰り、医師・助産師・看護師・MSW・臨床心理士などと「私たちに求められていることは何か」について議論し、医療にできることを模索し実践してきました。十代未婚で出産する事例、経済的に困窮している事例、外国人で地域になじんでいない事例等の社会的ハイリスク事例に数多くかかわる中で、夫からの暴力すなわちDVが及ぼす女性の心と身体への影響がいかに大きいか、DVのある家庭環境は子どもにとっていかに虐待的かを認識するに至りました。

一方で、性暴力の被害者を外来で診療することも少なくなく、性暴力が女性の「リプロダクティブヘルス&ライツ」を著しく脅かすものであり、産婦人科医療が被害者の診療とケアをもっと担うべきであると考えるようになり、院内外の有志とともに、2010年4月、阪南中央病院内に性暴力救援センター・大阪

SACHICOを開設しました。SACHICOは、性暴力に特化したトレーニングを受けた支援員が常駐し、24時間体制で性暴力被害者からの電話に対応し、産婦人科医師の診療を始め、弁護士を紹介したり、警察に通報したり、カウンセリングを提供したり、被害者にとって必要な支援を提供する、日本で初めての総合的な支援センターとして機能しています。こういった支援センターは少なくとも各都道府県に1か所は必要であり、今その必要性を訴えて全国各地を駆け巡っています。

私の歩んできた産婦人科医師としての道のりは、荻野女史苦難の道と功績に比べると到底足元にも及びません。63才で亡くなった女史の年令をすでに超えてしまいましたが、この「荻野吟子賞」を女史からの叱咤激励と受け止め、性暴力のない社会に向けて微力を尽くしたいと思っています。



第33回 日本女医会学術研究助成を受賞して

名古屋市立大学医学部・講師 窪田泰江



このたびは、研究課題「過活動膀胱の発症機序におけるSCF-KIT(幹細胞因子)シグナル伝達系の機能解析—SCFを用いた過活動膀胱の新規尿中バイオマーカーの開発—」に対し、第33回日本女医会学術研究助成を賜り、心より御礼申し上げます。

私は名古屋市立大学を卒業後すぐ泌尿器科に入局し、臨床研修医の頃から上の先生の実験の手伝いをする機会が良くあり、研究を身近に感じていました。その中でも印象的だったのは、宇宙空間での生殖機能の実験です。無重力空間を作るため、パラボリックフライトという航空機の放物線飛行を体験させて頂き、実際に身体が宙に浮いたことは忘れられません。

第一子出産後は、排尿機能につき学ぶため、平滑筋の研究を細胞生理学教室でご指導いただきました。そこで数年間研究と臨床を同時進行させ、その間に第二子を出産、その半年後に学位を取得しました。その後、同じく泌尿器科医の夫と子供の家族全員で英国オックスフォード大学に留学する機会を頂きました。高額な家賃と保育園代でかなりの赤字でしたが、異国で暮らすという非常に貴重な経験ができました。そして、その間に現在の研究の大本になっているKit

陽性間質細胞との出会いがありました。Kitで標識されるカハールの間質細胞は、消化管ではペースメーカー細胞として重要な役割をしていますが、膀胱におけるKit陽性間質細胞の役割についてはまだ良くわかっていません。私達は頻尿を呈する過活動膀胱患者の膀胱や頻尿モデル動物の膀胱では、この細胞が増加していることを確認しており、現在その役割を解明すべく、排尿グループの仲間と一緒に研究を続けているところです。わが国において、尿失禁や頻尿の原因である過活動膀胱患者は800万人を数え、超高齢化社会を迎え今後さらに増えると考えられています。このような疾患に対する新たな治療薬や尿中バイオマーカーの開発もめざし、これまでの研究が少しでも実地臨床に還元できるよう、さらに精進していく所存であります。

現在末っ子の第4子がようやく4歳になりましたが、家事・育児と臨床・研究の両立はどちらも中途半端になってしまいがちで、職場では同僚や後輩に、家庭では夫・子供や両親に負担をかけてばかりです。ここまで継続できましたのも、本当にいろいろな面で多くの方々に支えて頂いたお陰と感謝しております。少しずつではありますが、これまで同様に臨床・研究を継続し、患者さんのためになる医療を行いたいと思っています。

今回、日本女医会という由緒ある会から研究助成をいただき、津田喬子会長をはじめ、選考委員の諸先生方、またこれまで本研究に対し、ご協力いただきました諸先生がたに深謝申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう心よりお願い申し上げます。



日本女医会学術研究助成の 光栄に浴して

東北大学医学系研究科 齋木由利子



このたびは、研究課題「マイクロRNAによる食道がんの抗がん剤感受性予測」に対し日本女医会学術研究助成を賜り、たいへん光栄に思います。私の研究を選んでくださった津田喬子先生、選考委員の先生方に、心より御礼申し上げます。

私は東北大学医学部を卒業後、竹田総合病院内科、虎ノ門病院病理の研修を経て、東北大学医学部第二病理にて、学位を取得させていただきました。その後、

癌研究会癌研究所にて、臨床病理を勉強させていただきながら、がんの研究を続け、現在は東北大学医学系研究科分子病理学分野に所属し、研究と学生の教育に携わっています。

本研究で扱うマイクロRNAは、代表的なnon-coding RNAで、RISC(RNA induced silencing complex)とともにターゲットのメッセンジャーRNAに結合し、蛋白への翻訳をすることで機能を発揮します。百あまりの遺伝子を制御するマイクロRNAもあると推定されており、近年では、がんの発生や増殖に関する役割の他に、抗がん剤感受性の予測因子としての役割が明らかになってきました。

食道がんの術前治療や進行・再発症例に対しては、標準的な治療薬である5-FU系薬剤やシスプラチンの他に、タキサン系薬剤が用いられていますが、治療前に薬剤の感受性の予測ができれば、より効率的な治療を受ける事ができます。本研究では、食道がんの抗がん剤選択の指針を与えるマイクロRNAの同定をめざします。

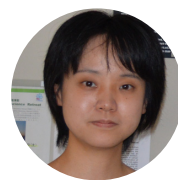
今回の助成金を大事に使い、良い成果をあげられるよう誠心誠意努力する所存です。今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



学術研究助成を受賞して

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・助教

坂根亜由子



もう、十数年も前のことになりましたが、私はブラックジャックのように多くの知識や高い技術を身につけてどのような患者さんでも救える実力、また、病床で苦しむ患者さんの心に寄り添える優しさを兼ね備えた医師になるという志を抱いて徳島大学医学部の門をくぐりました。

そのような私が、研究と出会ったのは医学部2年生の頃でした。当時の私にとって研究は全く未知の世界であり、無関係とさえ思われましたが、偶然にも友達と研究室に通うことになりました。最初は、見るもの聞くもの全てが新鮮で、医学部でこんな世界もあったのかと、びっくりしたのを覚えています。毎日の授業が終わるとすぐに研究室へと向かい深夜、時には日付が変わるまで実験に没頭しました。今日出来なかったことが明日、明後日にはできるようになって、

また、新しいことを学んで、ということが楽しくてどんどんのめり込んでいきました。今から思うと負けず嫌いであった私の性分に合っていたのだと思います。1年、2年と続けていくうちに、実験の楽しさだけではなく、医学部で研究することの重要性を意識するようになってきました。研究室に出入りするようになるまでは、臨床と研究を引き離して考えていた私でしたが、実際に研究の世界に足を踏み入れて体感することで臨床医学の将来には基礎医学研究が必要不可欠だと実感しました。

私は、徳島大学医学部で平成15年に新たに設立されたMD-PhDコースに進学し、その第一期生となりました。MD-PhDコースでは、医学部の4年次に入ったん退学し、大学院に入学します。3または4年間の研究期間を経て学位（医学博士）を取得後、医学部5年次に復学します。その後、通常のコース同様、病院実習を経て医師国家試験に臨みます。私は、医学部復学後も国家試験勉強の傍ら細々と研究を続け、医師免許を取得した後は医師臨床研修を受けずに、

そのまま基礎医学研究者の道に進むことを選択しました。

現在は、学部生（復学後も含めて）、MD-PhDコースの長きに渡りご指導いただいた佐々木卓也教授のもとで助教を務めています。医学生ではなく医学研究者として基礎医学研究の奥深さ、難しさに向き合い、日々苦悩しています。私が学生の時に佐々木先生が医学部での研究の必要性を伝えようとしてくださった言葉のひとつに「研究者にならなくても、研究者としての眼をもった臨床医になってほしい」があります。今の私は、臨床の現場にはいませんが、自分たちの研究成果をいつかは臨床医学の進歩・発展につなげるという志をもって日々奮闘しています。ですが、やはり道は険しく時には立ち止まり、くじけそうになることもあります。そのような時に、今回のような御助成をいただければと、大変励みになり、もう一度、足を前に踏み出すことが出来ます。最後になりましたが、この度、日本女医会学術研究助成を賜りました事、心より御礼申し上げます。

公益社団法人日本女医会 第58回 定時総会議事録

平成25年5月19日（日）午前10時45分より、仙台国際ホテル（宮城県仙台市青葉区中央4-6-1）において、第58回定時総会が開催された。

開会の辞

澤口彰子副会長より、開会の辞が述べられた。

司会の馬場安紀子理事より平成25年3月31日現在の会員総数1,492名に対し、出席者数81名、記名委任者数755名、合計836名であり、公益社団法人日本女医会定款第18条、第19条の規定により、会員総数の2分の1以上の出席があることから本総会は適法に成立している旨が確認され、開会を宣した。

黙祷

平成24年度中に物故された会員28名の方々の冥福を祈り、黙祷を捧げた。

会長挨拶

津田喬子会長より、議案の審議に先立ち挨拶があった。

報告

1) 小関温子副会長より、配布資料「平成24年度会務報告」に基づき会員動静、第57回定時総会時での審議の結果、評議員会（仮称）、会費納入状況、理事会、部会、各賞の選考委員会、日本女医会創立110周年並びに公益社団法人認定記念式典・講演会・祝賀会準備委員会、および実行委員会等の会務報告が行われた。

その後、平成24年度に行われた事業の報告があった。

2) ナショナルコーディネーターの矢口有乃理事より、国際女医会次期会長に、韓国の朴京雅教授、日本女医会が属する西太平洋地域の会長として山本

子理事が選出された旨報告があった。

その後、7月31日より開催される第29回国際女医会への参加の呼びかけがあった。

以上の報告につき、司会者が質問、意見を求めたところ以下の質疑応答があった。



質問：昨年度の吉岡弥生賞選考委員会において該当者なしと決定したとの報告があったが、何名の該当者と推薦者があったのか、また該当者なしという結果はどのようなことから決定されたのか。女医会の会員以外にも授与ができるのか。

回答：公益法人移行後は、吉岡弥生賞、および荻野吟子賞、学術研究助成については、会員外からの応募も認めている。

昨年度は、2人の推薦があり、外部委員も含む委員7名で厳正に調査、投票を行った結果、今回は該当者はなしと決定した。

質問：立候補、推薦の条件を会報などで広報してほしい。

回答：会報への掲載は、次回以降に実施する。

司会の馬場安紀子理事より、以上の報告事項の承認が諮られ、拍手多数で承認された。

議長団選出

司会より会場に対して議長団並びに議事録署名人の推薦について諮ったところ、会場より「会長一任」の声があり、会長一任によって、議長団に高木久佳会員、黒崎伸子会員、議事録署名人に藤根美穂会員、金田八重子会員が指名され、拍手多数で、異議なく選出された。議長団は議長席に着席した。

議事

【第1号議案】

平成24年度事業報告の承認の件
対馬ルリ子副会長より、配布資料「平成24年度事業報告」に基づき説明が行われた。

【第2号議案】

平成24年度決算報告承認の件
塚田篤子理事より配布資料「平成24年度収支計算書」に基づき説明が行われた。

【会計監査報告】

山崎トヨ監事より、平成25年4月20日に慎重かつ厳正な会計監査を実施し、その結果、適法かつ正確であることを確認した旨が報告された。

議長は第1号・第2号議案について質問等がなかったため採決に入った。賛成者の挙手を求めたところ、挙手多数（2分の1以上）と認めた。

議長は以上の結果、第1号・第2号議案は原案のとおり承認可決した旨を述べた。

【第3号議案】

平成25年度事業計画
対馬ルリ子副会長より配布資料「平成25年度事業計画」に基づき説明があった。

庶務部

1. 諸会議（理事会、総会、支部・本部連絡会）の運営
2. 会員増加推進への努力
3. ブロック懇談会の開催
4. 日本女医会吉岡弥生賞の募集

学術部

1. 学術研究助成
2. 会員の学術向上に貢献する活動

事業部

1. 全国公募による公開講演会
2. 日本女医会荻野吟子賞の募集
3. 提言論文事業
4. 災害、緊急時行動

渉外部

1. 国際婦人年連絡会への参加
2. 国連NGO国内婦人委員会の活動
3. 内閣府男女共同参画局連携会議への参加
4. 厚生労働省健やか親子推進協議会への参加と活動
5. 国内外女医会との交流
6. 国内外医療関係団体との交流

広報部

1. 機関紙の発行
2. ホームページの更新と活用

ナショナルコーディネーター

1. 2013年第29回国際女医会議に向けての準備
2. 2013年第29回国際女医会議に参加
3. 2013年国際女医会西太平洋地域本部および国際女医会本部へ報告
4. 日本女医会の活動状況を西太平洋地域本部および国際女医会本部へ報告
5. 国際女医会本部より発信された情報伝達

小児救急事業委員会

1. 「どうしよう…子どもの救急」日本語版及び英語版を増刷し、販売

十代の性の健康支援ネットワーク事業委員会

1. 「十代の性の健康支援ネットワーク事業」を継続

男女共同参画事業委員会

1. キャリア・シンポジウムの開催
2. 各大学での調査継続と冊子の発行

長寿社会福祉委員会

1. 高齢者医療、介護に関する講演会
2. アンケート調査
3. DVD「たんの吸引を安全に使うために」の販売

MsACT委員会

1. MsACT医学英語セミナー事業（学生・研修医向け）
2. MsACT学生会員および若手医師支援
3. MsACT活動（第29回国際女医会議にてポスター発表および口演等）

質疑応答に移る前に、議長より第3号議案の「平成25年度事業計画」は「事業計画（案）」、第4号議案は「平成25年度予算（案）」の承認となるため、総会で承認された時点で（案）を取るようになる旨の発言があった。議長は第3号議案に「平成25年度事業計画」につき質問、意見を求めたところ下記の質疑応答があった。

質問：例年事業計画案の中には、軽井沢セミナーの開催があるが、これはどの部の担当となっているのか。

回答：軽井沢セミナーは、同好会として庶務部が担当している。

質問：それであれば、庶務部の事業計画の中に入れるべきではないのか。回答：今後は入れることを検討する。

その後、議長より第3号議案、および第4号議案はすでに理事会で承認をされているため（案）はつかないとの訂正があった。これに対し、以下の質疑応答があった。

質問：当会は総会が決定機関であり、当該議案には（案）がつくべきではないのか。

回答：公益法人への移行以降は、事業計画、および予算は手続き上3月31日までに内閣府へ提出をしなくてはならない。そのため、3月の理事会において承認をしているが、定款の中には、総会での承認も明記されているため、原案を再度総会の議案として提出している。

質問：それは、今回だけのことになるのか、来年以降も理事会承認となり、総会が形骸化することなのか。

回答：現在の定款は、内閣府から承認を得ているものであり、総会の議決を得るということが明記されている。内閣府に対しては、理事会の承認を得たものを提出するかたちをとっているが、日本女医会としては、総会において承認されたものを正式とする立場をとる所存であり、総会が形骸化するといった認識はない。

質問：その場合、もし理事会で決定し、内閣府に提出したものが、総会において否決された場合どうなるのか。

回答：本件については、今後、総会の開催時期、定款の文言など再考する必要があるため、理事会において十分な検討を行ったうえで、改めて提案をさせて頂きたい。

質問：会計年度が3月31日までだった場合、31日までに内閣府に対して事業報告と決算を提出するのは物理的に不可能なのではないか。

この質問に対して、津田会長から事務局担当者に回答をするよう指名があった。

回答：決算報告については、6月末日までに提出期限となっている。したがって、先ほどの事業

報告と承認を頂いた決算諸表は6月末までに提出することになる。

以上の質疑応答の後了解が得られたため、議長は採決に入った。賛成者の挙手を求めたところ挙手多数（2分の1以上）と認めた。

議長は以上の結果、第3号議案は原案のとおり承認可決した旨を述べ、平成24年度事業計画案は承認された。

【第4号議案】

平成25年度予算の承認の件
塚田篤子理事より配布資料「平成25年度収支予算書」に基づき説明が行われた。

議長は第4号議案について質問等がなかったため採決に入った。賛成者の挙手を求めたところ、挙手多数（2分の1以上）と認めた。

議長は以上の結果、第4号議案は原案のとおり承認可決した旨を述べた。

【第5号議案】

次期および次々期総会開催地について

津田喬子会長より、次期開催地については東京において本部主催での開催、次々期については、現在群馬支部において開催の検討を依頼している旨が述べられた。

議長は第5号議案につき質問等がなかったため採決に入り、賛成者の挙手を求めたところ挙手多数（2分

の1以上）と認めた。

議長は以上の結果、第5号議案は原案のとおり承認可決した旨を述べ、時期および次々期開催地に関する件は承認された。

議長は以上を以って第57回定時総会の議案の全ての審議が終了した旨を述べ、議長団は降壇した。

表彰

- 1) 荻野吟子賞受賞者
加藤 治子
- 2) 学術研究助成金受賞者
窪田 泰江
(名古屋市立大学 泌尿器科・講師)
齋木由利子
(東北大学医学系研究科・助教)
坂根亜由子
(徳島大大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・助教)
- 3) 第2回提言論文受賞者
皆川 智子
(弘前大学医学部付属病院皮膚科 医員)
安川 康介
(バイラー医科大学 感染症科フェロー)
安岡紗哉香
(徳島大学医学部医学科3年)

閉会の辞

小関温子副会長より、閉会の言葉を述べ閉会を宣した。

午前10時43分閉会



京都支部 の 集い

京都支部長 石川知子

2013年3月3日(日) 京都駅、京都タワー近くのリーガロイヤルホテルで、「京都支部の集い」を開きました。22名(出身校8大学)の参加で、3名の若い京大女子医学生、はじめて参加して頂いた1名の先生と、ご一緒させて頂くことができました。滋賀医科大学内科学講座 糖尿病・腎臓・神経内科の前川聡教授に「Patient-Centered Approachによる糖尿病治療を考える」と題して、ご講演を頂きました。講演後の質問時間にはつきつきと手が挙がりましたが、そのいずれにも分かり易く答えて頂きました。「糖尿病の講演

会が多いけれど、こんなに実のある話はなかった」、「今日出席して良かった」と皆さんが喜んでおられました。その後は例年どおり、全員そろっての記念撮影。そして、隣の懇親会場へ。「古今集の数首の春の歌をもとに、ウグイスの鳴き始めから、若葉、梅、藤の花、そしてウグイスの鳴き納めという春の初めから終わりまでの風景を詠まれた香り立つ春の雰囲気を感じとって下さい」という説明で、雅びな和装姿での琴の演奏が始まりました。「春の曲」に次いで「サクラサクラ」「荒城の月」となじみ深いメロディーで、和の世界にひたりました。春と女性を心に描いた今が「旬」の食事の数々。フィナーレは、消灯しての炎のパフォーマンスとともに大きなダークチェリーのデザート。

森本先生の司会、そして、石崎先生・山本先生・飯田先生の福引きのお手伝いで、1等、2等、3等の



方には舞子さんの花かんざしや手作りの和装小物が贈られました。そして、全員には「恋いろ 想いそめし ARARE: ショコラ 43」(「恋」の歌 43首にちなんで作られたカカオ 59%のショコラ)を手土産に次回の再会を誓いました。

10年間強と支部長をつとめさせて頂き、ありがとうございました。次の会からは芦田ひろみ先生にして頂く事になりました。

借景の 山の眠れる 竹林

濱田 正把

選択的DPP-4阻害剤 [2型糖尿病治療剤]
処方せん医薬品^{注1} 薬価基準収載

ネシーナ[®]錠 25mg
12.5mg
6.25mg

(アログリプチン安眠香酸塩錠) 注) 注意—医師等の処方せんにより使用すること

効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等は、添付文書をご参照ください。

2012年6月作成

〔資料請求先〕
武田薬品工業株式会社 医薬営業本部
〒103-8668 東京都中央区日本橋二丁目12番10号

第34回 日本女医学会学術研究助成のご案内

日本女医学会では医学の発展・向上に寄与する研究を行っている会員の方々の学術研究に対し助成事業を行ってまいりました。平成24年4月に公益社団法人に移行いたしましたので、昨年の第33回より日本国内在住の全女性医師を対象として優れた研究に対して助成を行う事となりました。つきましては、希望者は下記応募要領にしたがって当会あてに申請くださいますようお願い申し上げます。

記

1. 助成の趣旨 後進の研究助成を図り、医学分野の発展、向上に寄与する事を目的とする。
2. 助成金額 1件 30万円まで（採択件数：3件）。
3. 申し込み手続き
 - 1) 応募資格 日本国内在住の女性医師。
 - 2) 助成期間 原則1年間。同一人が重ねて申請をする場合は3年以上の間隔をおくこと。
 - 3) 応募方法 日本女医学会ホームページ（<http://jmwa.or.jp/joseikin.html>）より所定の用紙をダウンロードして作成し、電子メールに添付して応募。宛先：公益社団法人日本女医学会 office@jmwa.or.jp
 - 4) 申込期限 平成25年12月25日必着。
 - 5) 選考及び発表方法 選考委員会において選考の上、日本女医学会理事会で決定し、申請者宛てに通知する。
 - 6) 助成金の贈呈 平成26年5月18日開催の日本女医学会総会（東京・京王プラザホテルにて開催予定）の席上。
 - 7) 受賞者の本会に対する報告 平成27年9月4日までに研究経過報告書（日本女医学会誌掲載用）と収支報告書およびホームページ「学術研究助成受賞者の軌跡」欄（<http://jmwa.or.jp/kiseki/index.html>）寄稿原稿を提出していただきます。
- 8) 問い合わせ 公益社団法人日本女医学会 事務局
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-8-7 青山宮野ビル3階
Tel：03-3498-0571 Fax：03-3498-8769 e-mail: office@jmwa.or.jp

公益社団法人日本女医学会

(((理事会議事録)))

平成25年度第1回理事会議事録

1. 日時・場所

日時 平成25年4月20日(土)
午後3時～6時
場所 公益社団法人日本女医学会 会議室

3. 出欠席者

1) 出席者

理事 津田喬子 小関温子
澤口彰子 対馬ルリ子
谷智子 古賀詔子
諏訪美智子 高原照美
田辺晶代 塚田篤子
馬場安紀子 濱田啓子
藤川真理子 前田佳子
宮崎千恵 矢口有乃
山本纈子 横須賀麗子
吉馴茂子

幹事 松井ひろみ 山崎トヨ

2) 欠席者

理事 川村富美子 齋藤恵子
中田恵久子 宮本治子

2. 審議事項

1. 第58回定時総会について

- 1) 韓国女医学会からの懇親会への参加について <承認>
古賀理事より、前回の理事会での審議事項であった韓国女医学会の懇親会への参加について、宮城県女医学会より承認を得た旨報告があった。
・韓国女医学会からの参加は2名。
・参加は、エクスカッションと懇親会とし、総会には参加しない。
・5/18午後9時懇親会の終了後、別席において話し合いを持つため、ホテル1階のオープンスペースに10人程が座れるスペースを確保している。
・上記の費用は、すべて韓国側の自

費とすることを確認した。

- 2) 懇親会出席者の件 <承認>
古賀理事より、現在の出席申込者は77名との報告があった。
また、ランチョンセミナーの座長は、進藤百合子先生仙台オープン病院呼吸器内科部長兼医療連携副センター長)に決定した旨の報告があった。
- 3) 見積もりについて <承認>
古賀理事より最終的な見積書が提示され、各項目について説明があり、承認された。
・託児費用は、宮城県医師会より援助が出る。(事務が申請を行う)
・「支部・本部連絡会」は水(無料)を提供する。コーヒーを希望する方はホワイエで飲んでいただく。
- 4) 議題について <承認>
議題を以下の通り決定した。
・開会の辞
・会長挨拶

<ul style="list-style-type: none"> ・物故者への黙祷 ・平成24年度事業報告の件 ・平成24年度決算報告の件 ・会計監査報告 ・平成25年度事業計画案 ・平成25年度予算案 ・次期及び次々期総会開催地に関する件 <p>次々期総会の開催地については、候補地として群馬が挙げられているので、山田邦子先生(群馬支部)にお伺いをし、次回までに回答を頂くこととした。また、その他の候補地として、埼玉、栃木も挙げられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当日の進行は別紙第58回定時総会進行表の通りとする。 <p>2. 創立110周年ならびに公益社団法人認定記念式典・講演会・祝賀会について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・収支決算報告 <承認> <p>濱田理事より110周年関連の収支が報告され、承認された。</p>	<p>今後の反省点として、予算の策定がなされた後に事業計画を作成することが望ましいという指摘が古賀理事よりなされた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真の焼き増しと郵送の経費について <承認> <p>来賓の写真は事務局から個別に発送する。会員の写真については、4月25日発送の会誌に同封する。</p> <p>宮崎理事より提出された焼き増し費用が承認された。</p> <p>3. 会誌特別号について <承認></p> <ul style="list-style-type: none"> ・215号発行予定日(7月25日)110周年関連と第58回定時総会を柱にするとした内容が山本理事から発表され、承認された。 ・会誌の掲載広告を取るよう呼びかけがあった。 <p>4. 学会女性医師ネットワーク(仮称)の構築について <継続></p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学会の女性部会、男女共同参画関連部会等とのネットワーク構 	<p>築し、取りまとめてゆく構想が藤川理事から報告され、今後は継続審議事項として事業部、もしくはMsACT委員会で進める事を決定。次回に具体的な構想を発表することとなった。</p> <p>5. 平成25年度の理事会開催日およびメールによる部会について <継続></p> <ul style="list-style-type: none"> ・理事会の開催を隔月とするか毎月とするかが議論され、各理事の意見を鑑み庶務部で原案を作成することに決定した。 ・理事会の開催については、理事の交通費は支給される、ブロック懇談会の場合は、自費とすることを確認。 ・部会の開催はメール等事前の打ち合わせの上、理事会前に各部の意見を取りまとめ、それを議事録にまとめることが承認された。 ・5月19日に開催する第2回理事会
---	---	--



選択的ヒスタミンH₁受容体拮抗・アレルギー性疾患治療剤 薬価基準収載

タリオン® 錠5mg・錠10mg
OD錠5mg・OD錠10mg

TALION® Tablets 5mg・Tablets 10mg (ペボタスチンベシル酸塩製剤)
TALION® OD Tablets 5mg・OD Tablets 10mg (ペボタスチンベシル酸塩口腔内崩壊錠)

処方せん医薬品(注意-医師等の処方せんにより使用すること)

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

提携 **宇部興産株式会社**  製造販売元(資料請求先) **田辺三菱製薬株式会社**
大阪市中央区北浜2-6-18

2009年10月作成

は、午前8時から9時まで朝食会を兼ねて開催する。（交通費の支給はない）

6. 平成24年度第7回理事会(3月)議事録承認 <承認>

平成24年度第7回理事会議事録が承認された。

7. 平成24年度3月会計報告(資料6) <承認>

塚田理事より平成24年度3月の会計報告がされ、承認された。

8. その他

・会誌に封入する寄附金チラシについて <承認>

対馬理事より、会誌に同封する寄附金のチラシを毎月から、年1回程度にする提案がなされ、次回は11月に封入する旨決定した。

会誌の郵送形態(A4か、三つ折りか)については、今後広報部で検討をすることに決定した。

3. 継続審議事項

1. 東日本大震災被災地への継続的支援について

1) 岩手県中学生オーストラリア派遣事業への継続的な援助について <継続>

対馬理事より、当該プロジェクトについて5年間、計200万円程度の支援の要請があり、ひとまず2年間100万円の支援を決定した。以降については、継続審議とする。

2. HP「支部だより」の再開と公開講演会助成募集の掲載について

公開講演会助成募集の掲載が承認された。 <承認>

4. 報告事項

1. 各部、NC報告

1) 平成24年度会計監査について
松井監事より、同日行われた会計監査について、問題なく終了した旨報告があり平成24年度決算諸表等

が承認された。

2) 庶務部報告

馬場理事より、会員数の減少についてなんらかの対策が必要であることが述べられ、今後の課題とする旨話し合われた。

3) 広報部報告

澤口副会長より、国連 NGO 婦人委員会に出席した旨報告があった。

2. 各委員会報告

1) 男女共同参画事業委員会

10月20日(日)に開催するキャリア・シンポジウムについて報告があった。

3. その他

パート職員が、4月20日をもって退職した旨、津田会長より報告があった。



マクロライド系抗生物質製剤〔薬価基準収載〕
処方せん医薬品^注

クラリスロマイシン製剤

日本薬局方 クラリスロマイシン錠

クラリス[®]錠200

日本薬局方 クラリスロマイシン錠

クラリス[®]錠50小児用

**クラリス[®]ドライシロップ
10%小児用**

注) 注意一医師等の処方せんにより使用すること

※「効能・効果」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「禁忌を含む使用上の注意」は添付文書をご参照ください。



発売【資料請求先】

大正富山医薬品株式会社

〒170-8635 東京都豊島区高田3-25-1



製造販売

大正製薬株式会社

〒170-8633 東京都豊島区高田3-24-1

CLA42 2009.7

公益社団法人日本女医会

(((理事会議事録)))

平成25年度第2回理事会議事録

1. 日時・場所

日時 平成25年5月19日(日)

午前8時～9時

場所 仙台国際ホテル

2. 出欠席者

1) 出席者

理事 津田喬子 小関温子

澤口彰子 対馬ルリ子

大谷智子 古賀詔子 齊藤恵

子 高原照美 田辺晶代 塚田

篤子 中田恵久子 馬場安紀子

濱田啓子 藤川眞理子

前田佳子 矢口有乃 山本

子 横須賀麗子 吉馴茂子

幹事 松井ひろみ 山崎トヨ

2) 欠席者

理事 川村富美子 諏訪美智子

宮崎千恵 宮本治子

2. 審議事項

1. 第58回総会について

1) 議事進行について

馬場理事より、当日の段取りについての案内があり、その後津田会長を中心に会の進行、議長、議事録署名人の選出方法について確認を行った。

2. 平成25年度第1回理事会(4月)

議事録

<承認>

平成25年度第1回理事会(4月)

議事録が承認された。

3. 平成25年度4月会計報告

平成25年度4月の会計報告が承認された。

3. 継続審議事項

1. 平成25年度の理事会開催日について

平成25年度の理事会開催日について馬場理事より説明があり、検討の結果以下のように決定した。

・理事会の開催を午後3時30分から5時30分までとし、延長は最大30分までとする。

・部会は、原則午後2時30分からはとするが、午後1時30分から開始してもよい。

開始時間の詳細はその都度各部内で相談する。

メールによる部会は、あくまで部内の意見調整に留め、必ず理事会前に顔を合わせたかたちで部会を行うよう、会長から確認があった。

山本理事よりメールでの意見交換等についての問題提起があり、次回以降の議題とすることとなった。

2. 東日本大震災被災地への継続的支援について

1) 岩手県中学生海外派遣事業への継続的な援助について

齊藤理事より、中学生海外派遣事業の経年的な支援について今後も検討してほしい旨発言があり、今回は他団体へのチラシ等に日本女医会の後援を明記することが承認された。

対馬副会長より、今後はオーストラリア女医会との連携も視野にいれる旨報告があった。

支援する中学生を女子に限るか否かについては継続審議となった。

3. 学会女性医師ネットワーク(仮称)について

藤川理事よりネットワーク作りの構想のついでの説明があり承認された。

4. 報告事項

1. 各部、NC報告

1) 学術部報告

前田理事より「新しい治療とトピックス」の進捗状況の報告があった。

2. 各委員会報告

1) MxACT委員会

藤川理事より、MsACT委員会が独立委員会であるか否かを確認する旨の発言があり、次回理事会の審議事項となった。

また、最後に津田会長より6月理事会において、部の編成の再構成を検討する旨発表があった。

以上

寄附者一覧(敬称略 H25.4.1～7.31)

以下のとおりお知らせいたします。ご協力ありがとうございました。



奥田電気工業(株) 代表取締役 奥田博昭
金子ミサヲ(秋田) 佐藤喜美子(板橋)

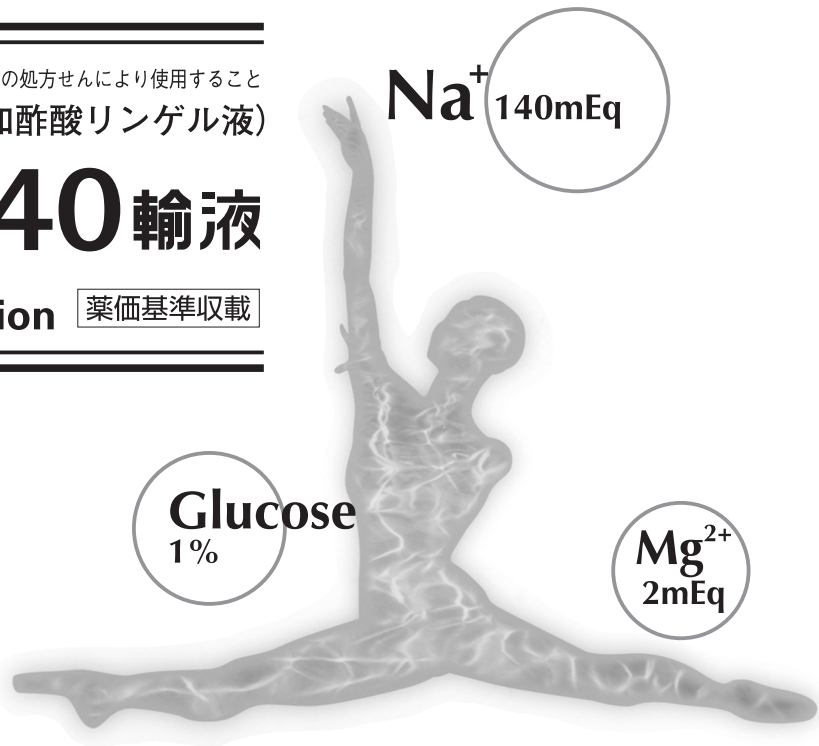


新しい細胞外液補充液の提案

処方せん医薬品* *：注意—医師等の処方せんにより使用すること
電解質輸液(1%ブドウ糖加酢酸リンゲル液)

フィジオ[®]140輸液

Physio[®]140 Injection 薬価基準収載



【禁忌(次の患者には投与しないこと)】

高マグネシウム血症、甲状腺機能低下症の患者[本剤の電解質組成により高マグネシウム血症が悪化するおそれがある。]

【効能・効果】

循環血液量及び組織間液の減少時における細胞外液の補給・補正、代謝性アシドーシスの補正

《効能・効果に関連する使用上の注意》

本剤はエネルギー補給を目的とした薬剤ではないため、エネルギー補給を目的に使用しないこと。

【用法・用量】

通常、成人1回500~1000mLを点滴静注する。投与速度は通常成人1時間あたり15mL/kg体重以下とする。

なお、年齢、症状、体重により適宜増減する。

《用法・用量に関連する使用上の注意》

本剤はエネルギー補給を目的とした薬剤ではないため、本剤の投与により患者の循環動態等が安定した場合には、患者の状態を考慮の上、漫然と投与することなく本剤の投与を中止し、必要に応じ維持輸液や高カロリー輸液等の投与に切り替えること。

【使用上の注意】—抜粋—

1.慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

- (1)腎疾患に基づく腎不全のある患者[水分、電解質の調節機能が低下しているので、慎重に投与すること。]
- (2)心不全のある患者[循環血液量を増すことから心臓に負担をかけ、症状が悪化するおそれがある。]
- (3)高張性脱水症の患者[本剤では水分補給が必要であり、電解質を含む本剤の投与により症状が悪化するおそれがある。]
- (4)閉塞性尿路疾患により尿量が減少している患者[水分、電解質の過負荷となり、症状が悪化するおそれがある。]
- (5)糖尿病の患者[ブドウ糖の組織への移行が抑制されているので、高血糖を生じ症状が悪化するおそれがある。]

2.副作用

総症例数201例中2例(1.0%)2件の副作用が報告されている(承認時、1999年)。

種類・頻度	0.1%~0.5%未満	頻度不明
循環器	ST低下、不整脈	
大量・急速投与		《脳浮腫、肺水腫、末梢の浮腫》

◇：維持液でみられる副作用(第一次再評価結果その14,1978年)

◇その他の使用上の注意等は、製品添付文書をご参照ください。



販売提携 大塚製薬株式会社 東京都千代田区神田司町2-9
製造販売元 株式会社大塚製薬工場 徳島県鳴門市撫養町立岩字芥原115

資料請求先

株式会社大塚製薬工場 輸液DIセンター
〒101-0048 東京都千代田区神田司町2-2

◀11.04作成

第7回
日本女医会同好会
軽井沢セミナーのお知らせ
(予定)

日時 平成 25 年 10 月 26 日
会場 軽井沢プリンスホテル
講師 俵 孝太郎氏

今年も秋の軽井沢で皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

会員以外のお友達もお誘い合わせておいでくださいませ。

軽井沢セミナー 担当 石原幸子



会員動静 (2013年6月20日現在・敬称略)

	氏名	支部	卒年
入会	萩原 明子	千代田	平 6
	森川 みき	宮 城	昭 63
	森山 美紀	千 葉	平 10
物故	千住 冬子	佐 賀	昭 7
	奈倉 早苗	愛 知	昭 15
	浜崎 浜子	高 知	昭 25
	濱田 雅	新 宿	昭 23
	原田 住江	都下東	昭 19
退会	45名 (H25年3月末自然退会 29名含)		

編集
後記

2013年は例年より2週間も早く東京の梅雨明け宣言がなされました。その翌日の7月5日から一気に35℃の猛暑日が続き、日本各地で多数の熱中症の患者が出ました。我が家の推定年齢13歳の飼猫も夏バテをおこしたようで急に食欲がなくなり、獣医さんに点滴をして貰いました。今、自宅からクリニックの途中にある有栖川公園では蝉しぐれで夏本番を思わせませす。さて7月31日から8月3日まで第29回国際女医会議・学術会議が韓国のソウルで開催されます。日本女医会の山本纈子理事がこの会議からDr.Rosa Nanchoの後任としてMWIA西太平洋地域のvice presidentに就任致します。次号の会誌216号ではソウルの国際女医会議・学術集会の口演発表とポスター発表の内容について少し取り上げる予定です。

(諏訪美智子)

義援金報告

お預かりしている東日本大震災義援金の使途精算をご報告させていただきます。(会誌211号掲載記事分)

・宮城県陸前高田市の市立保育所へ「どうしよう子供の救急」冊子を650冊お送りいたしました。77,350円を預り金より精算いたしました。

・デジタルMCA無線機を奥田電気工業(株)より5台購入し、4台をNPO法人全国ヘリコプター協議会へ寄与いたしました。(内1台は女医会事務局に設置)1,575,420円を預り金から精算いたしました。

・日豪ジュニアプロジェクトへ50万円の寄附

東日本大震災に際し、オーストラリア・メルボルンで、被災地岩手の中学生をオーストラリアに招待するプロジェクトが立ち上がり、この活動に賛同して50万(約2名分の留学費用)支援をする事となりました。

預り金の今後の使途につきましては、理事会にて検討を重ねておりますので、決定次第ご報告させていただきます。(平成25年7月末現在の残高、4,336,376円)

日本女医会誌

復刊第214号 2013年7月25日発行

編集人 山本 纈子

発行人 津田 喬子

制作 あづま堂印刷製

発行所 公益社団法人日本女医会

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-8-7

青山宮野ビル

TEL 03-3498-0571 FAX 03-3498-8769

http://www.jmwa.or.jp

e-mail : office@jmwa.or.jp